

## 沖縄的共同性と階層 (3)

### ——離脱する安定層——

○龍谷大学 岸政彦

社会理論・動態研究所 打越正行

大阪市立大学大学院 上原健太郎

本報告では、沖縄的共同性と階層との関係を考える。本報告では特に、沖縄の「安定層」の生活史から、「比較的生活が安定している層において、沖縄的共同性はどのように『生きられているか』」という問題と、「かれらの語りにおいて、『沖縄的なもの』はどのように語られているか」というふたつの点について分析する。

民間セクターが弱い沖縄だが、ゼネコンや電力会社、マスメディアなど、いくつかの地元の大企業が存在する。また、公務員と教員は、新規大卒者の理想的な就職先となっている。例えば地元エリート大学である琉球大学生の教員・公務員志向の強さは、何度も指摘される場所である。沖縄における安定層の代表として、われわれはこの、地元大企業社員、および教員と公務員を選び、詳細な生活史を聞き取った。調査期間は2012年8月、および2013年3月で、その間に県外出身者1名を含む25名から聞き取りをおこなった。本稿では県出身者24名の生活史を取り上げる。なお、第3回目の調査も2013年の夏におこなわれる。最終的に30名以上の生活史を聞き取る予定である。

調査の結果として、沖縄の安定層の人びとが、沖縄的な共同性や生活様式から相対的に「離脱」していることが浮かび上がってきた。たとえば、家庭内における方言不使用や三線などの伝統文化からの距離、あるいは親族ネットワークのつながりの弱さが語られた。地元の友人や同級生などとの付き合いや先輩後輩関係のつながりも少ない。日常的な友人付き合いは、同じような学歴や職業、階層の人びとが中心になる。方言や伝統文化については、たとえば琉球大学に進学してから伝統文化サークルなどで「後から」学習するものが多かった。社会人になってから模合に参加することもあがるが、それは生活資源ではなく純粋な「親睦模合」である。

琉球大学や本土の大学に進学することで地元の共同体から離脱し、大企業の社員や教員・公務員になることで、社会の「フォーマルなルート」に乗ることが可能になると、沖縄的共同性は必ずしも生活資源としては機能しない。このことが、「『沖縄的なもの』に対する客観的・再帰的な語り」を可能にする。たとえば、「経済的自立」という観点から沖縄的共同性や生活様式を批判するような語りが多く聞かれた。他にも自らの所属する共同体に対して距離をとる語りがしばしば語られた。

結果として、(1) 中間階層の人びとは沖縄のインフォーマルなネットワークや伝統文化から距離をとった生活を送っていること、(2) 沖縄的生活様式を客観的・批判的に語ること、(3) これらのことは沖縄的生活様式に依存しない生活基盤によって可能になっていること、という点が明らかとなった。

ともすれば（社会学者によってさえ）理想的・本質主義的に語られがちな「沖縄的共同性」だが、こうしたローカルな規範はもちろん実体として存在しているわけではなく、たとえばジェンダーや階層格差によってその内実はさまざまに異なる。われわれ3名による本プロジェクトの目標は、沖縄社会内部の多様性や格差について、質的調査を通じて立体的にそれを描くことにある。